広報 九州
国民の森林・国有林
平成22年3月10日
（２０１０年）
No １６５８
九州森林管理局
〒860-0081
熊本市京町本丁2－7
IP電話 050-3160-6600(代表)
http://www.kyusyu.kokuyurin.go.jp/

『九州森林環境シンポジウム』を開催

～増えすぎたシカと森林・林業の危機を考える～

2月26日、九州森林管理局2階大会議室において、当局主催による「九州森林環境シンポジウム」を開催。

同シンポジウムは、シカによる人工林での剥皮被害に加え、天然林においては下層植生が広範囲に食害を受けている深刻な状況となっています。また、希少種の絶滅や種の多様性の観点からも被害は危機的な状況となっていることから、増えすぎたシカによる林業や森林の生物多様性に及ぼす危機的な状況等について、専門家から報告をいただき、これらに関する情報の交換・共有化を図るとともに、対応策等について考えるもので、関係者を含め約１８０人の方々が参加しました。

中村支所長をコーディネータにパネルディスカッションを行う参加者

はじめに、沖修司九州森林管理局長が主催者挨拶。その後、宮城勇朗九州森林管理局計画部長をはじめ６者による報告、パネルディスカッションを行い、これからの九州におけるシカ対策などについて討論を行いました。

報告では、はじめに宮城勇朗九州森林管理局計画部長が、九州におけるシカ被害と対策の現状について報告。続いて、矢部恒晶（独）森林総合研究所九州支所森林動物研究グループ長が、九州のシカの生態と生息状況について、南谷忠志宮崎植物研究会会長が、シカが生物多様性（植物）に与える影響について、三枝豊平九州大学名誉教授が、シカが生物多様性（昆虫）に与える影響について、三原義之熊本県球磨地域振興局森林保全課長が、球磨地域におけるシカ対策の現状について、最後に羽澄俊裕（株）野生動物保護管理事務所代表取締役が、シカの個体数管理に関する取組事例について、報告がありました。

引き続き、中村松三（独）森林総合研究所九州支所長をコーディネータに迎え、パネリストには、報告をされた6人に入舟安行熊本県猟友会上球磨支部長と中園敏之（株）九州自然環境研究所代表取締役が加わり、パネルディスカッションが行われ、「増えすぎたシカの影響と今後の対応策」について討論が交わされました。また、会場からも、シカが森林機能に与えている影響及び対処法、九州脊梁山地における植物の保護、事前の意見等の中でも、貴重な植物の保護、皆伐後における食害防護対策、捕獲時期のあり方など活発な意見が出されました。

また、同シンポジウム会場入口には、シカによる森林被害状況や、シカ対策における九州森林管理局の今後の取組などに関するパネル展示コーナーも設けられ、参加された方々は熱心に見入っていました。

最後に、林業、農業、森林生態系、生物多様性への被害が危機的な状況にあるという認識の共有が図られたこと。対策には効果的・効率的な捕獲によりシカの個体数を減らしていくことが必要なこと。効果的・効率的な捕獲を実施していくためにはおのおのの地域において関係機関が連携していくことが重要であること。を確認し、終了しました。

（担当＝指導普及課）

自署の名山

宮崎森林管理署
宮崎森林事務所
森林官　河村　健

双石山『509m』
照葉樹林と奇岩が独特の自然美を見せてくれる

宮崎市内に所在し、年間を通じて登山者の多い双石山（ぼろいしやま）をご紹介します。

この双石山は標高509㍍であり、南北に岩稜の尾根をもつ低山です。この岩稜の西側には、天然記念物・林木遺伝資源保存林に指定されているツブラジイ、タブノキおよびシイ、カシなどを主とする照葉樹林と、奇岩・絶壁からなる独特な地形の自然美を見せています。

この山の東側には加江田渓谷を挟み斟鉢山（ぐんぱちやま）をはじめとする徳蘇（とくそ）山系の山並が南北に連なります。この一帯は県立公園に指定され、宮崎市内外から多くの人々が訪れ親しまれています。

この双石山に登るコースは多数ありますが、最も登山者が多いのは山頂西側の県道宮崎北郷線（県道27号線）沿いにある塩鶴登山口と小谷登山口から登る片道1時間半程度のコースです。磐窟（いわや）神社、空池、展望所など見所も多く、自然美を実感できます。また、同県道沿いには姥ケ嶽（うばがたけ）神社を経由できる50分程度の最短コースが九平登山口からあります。こちらは登山入口脇に採水場所もあり、下山時の疲れを吹き飛ばしてくれます。

この西側のコースは比較的緩やかに登り始めますが、岩稜手前では急峻になり、登山者泣かせの難所があります。

一方東側から上るコースは、丸野駐車場から椿山キャンプ場側の駐車場までの加江田渓谷に沿って遊歩道があり、この歩道から山頂に向かって登っていくコースが複数あります。

遊歩道は営林署時代のトロッコ軌道であり、その名残も見受けられます。緩やかな勾配で散策者も多く、渓谷探索・登山という者は満喫できます。

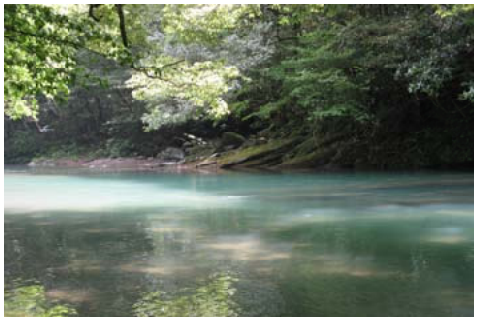
しかしながら、獣道や一部の者しか存知ない脇道なども多く、遭難事故なども多く起きているのが現状です。登山者は、余裕ある計画と充分な注意を行い楽しい登山をお願い致します。

最後に今回の紹介にあたり、管理施設以外も簡単に取り上げさせて頂きましたこと、ご了承頂ければ幸いです。

斟鉢山から日向灘を望む

双石山（標高509㍍）

遊歩道（営林署時代のトロッコ軌道跡）



加江田渓谷

イチイの保護作業に汗

【宮崎北部森林管理署】宮崎県椎葉村、熊本県泉村にまたがる白鳥山周辺の国有林内でイチイの保護作業を行いました。これは、近年異常に増えたシカの食害からイチイの木を守ろうと行ったもの。当日は熊本南部署職員、大国見会会員、椎葉村職員やボランティアなど15人が参加しました。当署職員がバークガード（樹皮保護カバー）の設置方法を説明後、2班に分かれて直径20㌢～1㍍50㌢のイチイの木72本に保護カバーを設置しました。小雨の中で作業でしたが、設置を終えた一行は公民館で意見交換会を行い、今後もお互いに協力しながら森林の保護に努めていくことを確認しました。

保護カバーを設置する参加者＝宮崎北部

捨てられたゴミを拾い集める職員ら＝鹿児島

市と合同でクリーン活動

【鹿児島森林管理署】鹿児島市下福元町の県道20号沿いの権現ヶ尾国有林内において、鹿児島市の協力を得てクリーン活動を行いました。当日は職員22人が参加。急傾斜地に捨てられたテレビやアンプ、タイヤや車の座席、瓶・缶などあらゆるゴミを一つ一つ拾い集め、リレー方式で道まで運び上げました。ゴミは約2トンに上り、市の車2台に積み込み回収しました。その後参加者は、注意標識の設置やロープを張るなどの作業に汗を流しました。今後とも活動を続けながら不法投棄防止に対する国民の意識の高揚と森林・緑の大切さを訴えるため関係機関と連携しながら取り組んでいくことにしています。

種子島小の児童らに森林教室

【屋久島森林管理署】種子島のヤクタネゴヨウ保全の会の要請を受け、種子島の小学生と担当教諭を含めた24人を対象に森林教室を行いました。高速船やバスを乗り継いで当署へ到着した児童らは、疲れも見せず森林の役割などの説明に耳を傾け、積極的に質問を行っていました。その後、庁舎内を見学。署長室では、ヤクスギの板やテーブルに興味を示していました。署長から九州間伐紙の名刺をもらった児童は、友達に自慢げに見せ、大切に持ち帰っていました。午後はヤクスギランドに移動し、屋久島環境文化研修センター職員の説明を受けながら林内を散策しました。児童らは、樹齢数千年の屋久杉をはじめ苔むした森や着生植物などの大自然と歴史の織りなす原生林に触れ、太鼓の世界に酔いしれているようでした。帰りに、日陰に残っていた残雪を目にした児童らは「初めて見た」と興奮した様子で記念写真を撮るなど元気いっぱいの森林教室となりました。最後に、児童から「いろいろな事が勉強できました。ありがとうございました」とお礼の言葉をいただき無事終了しました。

→熱心に耳を傾ける児童ら＝屋久島

森林管理署とともに五十年

ちょっと一言

私たち「九重の自然を守る会」は来年創立五十周年を迎えます。

この会の創立のきっかけとなったのは、九州横断道路の建設計画が持ち上がったときでした。完成後、登山者が急増し、観光客も増えて山での遭難や植物の盗掘等の問題が起こるのでは？と言う懸念からでした。そこで地元の人々が中心となり、行政、とりわけ営林署と厚生省国立公園部の当時の担当官の方々にも参画いただき、この会が立ち上げ創立されました。もう半世紀も前のことです。

九州の自然を守る会

副会長

船津武士さん

本会では、九重の登山者の安全確保と自然の保護を主な目的として活動してきました。併せて、自然に親しむ運動も展開し、その一環として、雨ケ池登山コースのエリアの一部を営林署より借用し、鳥の巣箱や樹名板を設置して、国有林の中を自然の学習の場としたのが、今の自然観察路の始まりでした。このように創立当初から、私たちと森林管理署との絆は強く今日に至っています。

森林の保全、登山道の整備、毎年行われる植樹祭、牧ノ戸峠の植生調査とミヤマキリシマの植樹は、地元玖珠農高の生徒諸君も熱心にその調査研究に協力してくれています。自然は常に災害と背中合わせでその管理は困難です。しかし、この自然が保たれてこそ動植物の営みがあり、私たちの生活もその恩恵を受けているのです。

ここ九重には毎年多くの人達がこの美しい自然を求めて来訪して頂きます。その方々が観察路の木道を歩き、草花を愛で小鳥の声に耳を傾け、「また九重に行きたい。」と思って頂けるように、私たち「九重の自然を守る会」は、今日も林の中で楽しみながら汗する今日この頃です。

第6回実践・公開講座

『竹かご』作りに26人が挑戦

熊本城内の一角にある監物台樹木園のみどりの交流館で、今年度最後となる第6回実践・公開講座「竹細工」を開きました。

同講座には26人が参加。熊本県伝統工芸館竹細工サークルの方々9人を講師に招き、見た目にも美しい「四つ目の竹かご」作りに挑戦しました。

講師の説明後、参加者は早速竹ひごの編み込みをスタート。交じり合うように編んでいくことはとても難しく、参加者のほとんどがこの作業で午前中の時間を費やしてしまいました。

午後からは縁の仕上げに取りかかりました。縁を切り取り、形を整えていくと完成はもう間近ですが、多くの参加者が四苦八苦している様子。しかし、そこは講師の腕の見せ所。参加者への手助けを行うと、遅れが目立っていた方の竹かごもいつのまにか綺麗に仕上げられていました。

作品を完成させようと一所懸命な参加者の皆さんは時間を忘れ竹かご作りに夢中となり、講座は予定時間を過ぎての終了となりました。

参加者からは「自分でもビックリの出来映え。長く使っていきたい。完成させることはできなかったが、作り方は教えていただいたので必ず我が家で仕上げてみせる」などの感想が聞かれ、竹の魅力を再認識した講座となりました。

（担当＝指導普及課）

竹かご作りに挑戦する参加者と講師

自動耕耘植付機による コンテナ苗の植付実演会に200人

植付け作業を見学＝森林技術センター

森林技術センター（宮崎市高岡町）では、去川国有林内において、森林管理署や九州各県の林業関係者ら約200人が参加して、森林総合研究所（茨城県つくば市）が開発した自動耕耘植付機とプランティングチューブによるコンテナ苗の植え付け作業実演会を行いました。

この自動耕耘植付機による実証試験は、平成21年度技術開発に係る重点課題「高性能林業機械・コンテナ苗を活用した低コスト育林に向けた実証試験」の現地植え付け作業の一環です。

これまで、育林作業では、高成長苗・大苗の植栽、ヘキサチューブの活用などの対策は行われて来たものの、労働強度の軽減を図り、併せてコスト削減も可能となる抜本的な対応が遅れています。

このため、育林部門での高性能林業機械及びコンテナ苗の実用化に向けた実証試験を行い、現場での導入に向けた改良・開発を進めるとともに、伐採から保育までの各種作業因子、作業形態の把握・分析を行うことにより、安全かつ労働強度の軽減と高効率化された育林システムを確立することを目標に技術開発を進めているものです。

この日の実証試験では、自動耕耘植付機がスギコンテナ苗を送る装置、各検知センサー、植える速さなどを確かめました。また、参加者からは、コンテナ苗の実用化に向けた取り組みなどの質問が相次ぎ、関心の高さが伺われました。

（担当＝森林技術センター）

小萩園でサクラの記念植樹

【熊本森林管理署】小萩園を市民に愛される桜銘花木園として再生させるため、「ライフサイクルの森」制度を活用し、誕生や入学、卒業、結婚などの記念となるよう、公募型による「第3回サクラ記念植樹会」を行いました。当日は、くまもと自然休養林金峰山地区保護管理協議会事務局長を迎え、50組の応募者約180人が参加し、松月などのサクラ5品種52本を植樹しました。標柱には「還暦を記念してすべての人に感謝。入学記念一年生うれしいな。みんなのサクラ記念」などのメッセージが添えられていました。参加者からは「ぜひ家族みんなで花見に来たい」などの声が寄せられ好評の記念植樹となりました。

サクラの記念植樹をする親子＝熊本

なかよく植樹をする親子＝北薩

白砂青松の森づくり植樹

【北薩森林管理署】当署と薩摩川内市みどり推進協議会との共催で、今回14回目となる「唐浜白砂青松の森づくり」植樹を薩摩川内市唐浜海岸で行いました。当地域は近年、松くい虫による被害が深刻化しています。当日は「松林の再生」を目指し、地元住民やボランティアなど約４００人が参加。寒風の吹く冬空の中参加者は、松林再生を願い、１１５０本の抵抗性クロマツを丁寧に植えました。その後、海岸林のクリーン活動も併せて行い、軽トラック2台分のゴミを回収しました。

児童らが木工品作りに挑戦

【西都児湯森林管理署】西都市立茶臼原小学校５・６年生のみどりの少年団27人が保護者らと一緒に木工品作りに挑戦しました。この催しは子供たちに森林教室や木工品作りを通じて木のぬくもりや緑の大切さを学んでもらうとともに、木材の需要拡大に繋げることを目的に、西都木青会、西都市および林活議連との協働で行っているものです。みどりの少年団員は地元産スギ材を使い保護者や職員らのアドバイスを受けながら、真剣な表情で本棚や椅子などの作品作りに取り組んでいました。

作品作りに夢中な児童ら＝西都児湯

児童ら防潮林の役割など学ぶ

【宮崎北部森林管理署】「お倉ヶ浜ふれあいの森」において、日向市ふるさとの自然を守る会と共催による植樹行事および自然環境会を開きました。地元の子供会をはじめ約70人が参加し抵抗性マツ２００本を植えました。親子で参加した家族は、スコップや鍬を使いながら丁寧に植え付け、苗木の横に自分の名前を入れた白杭を笑顔で立てていました。その後、同自然を守る会の大野森林インストラクターによる「自然環境教室」を実施。マツが枯れる仕組みや防潮林としての役割、海岸林内の植物についての話に、参加者は認識を新たにした様子でした。

なかよく植樹する親子＝宮崎北部

森林春秋

こんな夢を見た。

新規採用職員の研修に講師を依頼されるという。内容は「森の生態学」というタイトルで講義して欲しい、そう言われて分厚いハードカバーの本を手渡された。見るからにアカデミックな本で、とてもこの内容を講義するのは難儀だと、冷や汗をかいているところで目を覚ました。

けして寝覚めの良い朝ではない、昨晩のアルコールの悪戯なのかと思ったりもした。けれど、何でこんな夢を見たのだろう、いろいろ考えを巡らせてみると、最近、寝る前に読んでいる本が思い当たった。

ある方から、当局の職員だった方が書かれた古い本の話を聞きいた。とても興味深く、是非読んでみたいと思っていたところ、昭和40年代初めの本なのでなかなか見つけられずにいたが、思いは通じるもので、お持ちになっているＯＢの方から貸していただけることとなり手にすることができた。

伝えたいスピリッツ ～夢の啓示～

さて、その本とは、我々の先輩である清水正幸氏が書かれた「官林風土記」という本である。担当区主任（今の森林官）として現場に勤務された著者が、その経験に基づいて綴った林業最前線の姿で、そこには官林（国有林）の山々とともに暮らしている人々が、生き生きとユーモラスに描かれている。そして、地域に溶け込み、地域で暮らしながら山づくりに懸命に取り組んだ先輩達の生き様も垣間見ることができる。この本を読んで、これは「風土記」としているけれど、まさに「山の生態学」とも言えるなとも思った。そんな読後感から、こんな夢の啓示となったのだろうか。

ここ数年、国有林を巡る状況は目まぐるしく変化しており、特に今年は大きな変化の年になりそうである。「万物は流転する」との言葉のように、世の中が流れ、変わっていくことは止めようのないことで、私たちもそれに対応していかなければならない。しかし、そんな中にあっても、変わらずに保持していかなければならないこともあるのではないか。その一つには、「官林風土記」にも見ることができる、地域とともに山づくりにかけた先輩達の気概やこころざしなど、いわば「国有林スピリッツ」があるのではないかと考えている。私たちが引き継ぎ、次代を担う若い世代に是非とも伝えていかなければならないと思うのである。かつての活力にあふれた山村と、補助金のいらない林業を目指して。

なお、冒頭の夢の話は出来すぎ、作り話だろうと思われるかもしれないが、本当の話であることを申し添えておく。

（森林整備部長　大貫　肇）

池田小児童がサクラソウを贈呈

熊本市立池田小学校6年の前田さん、野口さんの2人の児童が当局を訪れ大切に育てたサクラソウの鉢を贈呈いただきました。

同小学校では「花を育てることで、児童の心を育てる。花を贈呈することで、地域とのつながりをもつ・・など」を目的に保護者の方々からなる「みどりのボランティア」と同小の緑化推進委員会の児童が協力し、毎年に取り組んでいるものです。

今回贈呈いただいた花は、作年6月に種を蒔き、8カ月をかけ大切に育てきたもの。幼稚園や保育園との交流会や1人暮らしのお年寄りとの給食会など、学校行事の祭に配られ地域の方々に喜ばれています。

贈呈いただいたサクラソウは局広報室に飾られ来庁される方々の目を楽しませています。

（担当＝総務課）

池田小児童からサクラソウの贈呈

第55回愛林駅伝開催される

【熊本森林管理署】当署と山都町の共催で自然愛護の心と緑豊かな故郷づくりへの意識をバトンタッチさせていこうと本年も愛林駅伝を開きました。当駅伝は、昭和13年に始り今回で55回を数えます。「愛林」と名の付く駅伝は、今や全国でただ一つと聞いています。レースには山都町、嘉島町、益城町、甲佐町の6校から中学2年生9チームが参加。矢部地区中心街を巡回する8区間24・7キロで競われました。当日はコンディションに恵まれ、6人が区間賞を獲得した甲佐中が2位以下を大きく引き離し優勝を果たし、大いに盛り上がった大会となりました。

一斉にスタートする生徒＝熊本

㉛モッコク（ツバキ科）

暖地の海岸近くに生える常緑広葉樹となっていますが、暖地であれば海岸近くでなくても分布しています。モッコクは葉の先端が丸く葉の基部がくさび形（楕円状倒卵形）になっているので、意識して観察すると比較的容易に覚えることのできる樹木です。

葉の付き方は枝の先に放射状に付くことから輪生、束生に見えますが厳密には互生です。

モッコクは、手入れしなくても端正な樹形になることから、庭の造園木として好んで使われ、きわめて普通な庭木です。造園木としては江戸時代に「江戸五木」の中にモッコクは入っており古い歴史を持っています。

モッコクの名前はセッコク（石斛・蘭の一種）に花の様子、花の匂いが似ており、樹木であることからモッコク（木斛）になったなどの諸説がありますが、確かなことは分かっていません。

私は林道脇や庭木として使われることから陽樹と思っていたが、今回調べたら「中陽樹」と解説があったので驚いた。

樹木園には中央東側に胸高直径20センチ、樹高3メートルのモッコクがある。

第21回冬季オリンピック・バンクーバ大会が閉幕した。もう一方の開催地の名で開かれる夏季のオリンピックとはひと味違う楽しみがあった。幸いにしてテレビで観戦する時間がいつもよりあったことだ▼日本は銀3・銅2の5個のメダル獲得となる結果であった。金メダルが今一歩のところで逃がす競技もあり、次回の大会にはぜひ頂点のメダルを獲得してほしいものだ▼小生はこの3月31日で現役の勤務が閉幕する。現役生活40年間、10ヶ所の局・署で勤務させてもらった。その中で培った色々な経験と知識は金メダル以上に値するものがあると考えている。また、行く先々の勤務地で出会えた人との繋がりは今後の人生生活の中で大いに役立つものと思う▼「光陰矢の如し」とはよく言った物だと今更ながらに考える。40年間の数字は確かに大きく見えるが、己の頭の中に過ぎってくるさまざまな想い出は「あっ！」と言う間の時間のようである▼これからは残された期間、再び、皆さまにお世話になりながら楽しく過ごしていきたいと考えています。（ベン）